

令和 5 年 4 月 28 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11528

研究課題名（和文）スポーツイベントにおける社会効果の検証とイベントレバレッジ戦略の構築

研究課題名（英文）The Social Impact of Sporting Events and Developing Event Leverage Strategies

研究代表者

押見 大地（Oshimi, Daichi）

東海大学・体育学部・准教授

研究者番号：40711205

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：2つのイベント（ラグビー2019および東京2020）が開催地域にもたらした効果として、ラグビー2019の方が東京2020に比べてよい社会効果を生み出したと捉える地域住民が多いことが明らかとなった。ただし、両イベントにおいてイベントから波及する効果を過大評価する傾向は共通していた。また、イベントから波及する効果を最大化する取り組みとして、大会の開催やスポーツ施設の改修などを通じて、開催地域内外への波及効果を大きくする試みが確認された。したがって、イベント前に過度にイベントの効果を喧伝するのではなく、イベント後を見据えた持続可能かつ戦略的な取り組みを行うことの重要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義としては、わが国で行われた2つのメガ・スポーツイベントを対象に、縦断データを用いて地域住民の社会効果を定量的に明らかにしたこと、そして、イベントを通じて開催地域の活性化をどのようにして展開していったのかを定性的に明らかにした点にある。我が国において、縦断データを用いたスポーツイベントの社会効果の検証やイベントレバレッジフレームワークを用いた事例は極めて少ないことから、今後わが国で実施されるスポーツイベントを開催・誘致するうえで有用なエビデンスを提供できたと考えられる。本研究を一つの事例として、今後行われる大小様々なイベントを対象に、エビデンスの蓄積が行われていくことが期待できる。

研究成果の概要（英文）：The results revealed that residents' perceptions of the social impacts of the Rugby World Cup 2019 were higher than Tokyo 2020. Moreover, the common results, in which residents overestimated the impacts of events were found in both events. Regarding the leveraging strategy in both events, two case studies were conducted. Developing new organizations, holding events including other related events, and renovating stadiums before and after the main events were common trials in both cases. The key factor for a successful leveraging strategy is having a clear vision to develop their region through sporting events with a sustainable standpoint of view.

研究分野：スポーツ経営学

キーワード：スポーツイベント 社会効果 開催地域 イベント効果の最大化 イベントレバレッジ戦略

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年は、スポーツイベントが開催地域にもたらすインパクトとして、開催地域住民を対象に、イベントに対する評価を測定する社会効果研究に注目が集まってきている。ところが、時系列データを用いた「縦断的検証」や、個々人の異質性を考慮した効果検証は十分な検討が行われていない。また、近年の研究ではイベント評価に加えて、イベント運営側の視点から、イベントが開催地域にもたらす社会・経済効果の最大化を目指す「イベントレバレッジ戦略の解明」が求められている。

2. 研究の目的

そこで、本研究では日本で開催された2つのメガ・スポーツイベントを研究文脈に、1) 開催地域住民を対象とした縦断調査を通じてイベントの社会効果を精緻に評価し、2) イベント運営者へのインタビュー調査を通じて、イベントレバレッジ戦略のメカニズムを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

社会効果の測定はインターネット調査を用い、イベントが開催されている地域住民(n=1,000)を対象に、性別・年齢・居住地等を考慮した割付によるサンプリングを行った。検証に使用する尺度は、申請者が開発してきた11因子35項目の包括的社会効果尺度(押見, 2018)を使用した。調査はイベント前後で行い、ラグビー2019は3か月前、4か月後、30か月後に東京2020は1か月前、2週間後、そして17か月後に調査を行った。研究2では、研究1の調査結果を踏まえつつ「どのようにしてメガ・スポーツイベントが開催地域にもたらす社会・経済効果を最大化したのか?」というリサーチクエッションのもと、半構造化インタビュー調査(n=5)を行った。インタビュー結果の書きおこしを行った後に、イベントレバレッジフレームワーク(Chalip, 2006)を参考に、レバレッジの資源、機会、戦略目標、手段及び課題事項の5つにコーディングを行い、解釈を行った

4. 研究成果

研究1で使用した尺度の信頼性や妥当性を確認した後に(Oshimi et al., 2021; Oshimi et al., 2022)それぞれの大会で行ったイベント前後の社会効果に対する認知の変化を確認した。結果を概観すると、ラグビー2019および東京2020ともに、イベント前と比較して、イベント後の方が社会効果の認知の値が下がる傾向が見られた。また、ラグビー2019と比較して東京2020の方が正の社会効果よりも負の社会効果に対する数値が高い傾向が見られたことから、東京2020の方が開催地域住民はネガティブに捉えられていたことがわかる。また、イベントへの支援意図に対しては、特に快感情の獲得や社会関係資本の促進、そしてスポーツへの興味促進といった要素が正の影響を与えることがラグビー2019のデータからは明らかとなっており、(Oshimi et al., 2021)同様に東京2020においても正の社会効果がイベントへの支援意図に正の関係性があることが明らかとなっている(Oshimi et al., 2022)。また、尺度の回答方法を「回答者自身への影響」か「地域全体への影響か」で分けて調査を行ったところ、自身への影響を問うた項目の方が支援意図への影響は大きくなる傾向が見られた(Oshimi et al., 2022)。

これらの結果を考慮すると、イベント開催地域の住民はイベントの効果を過大評価する傾向があり、これらは過去の先行研究でも指摘されてきた点である(e.g., Kim & Petrick, 2005; Balducks et al., 2011; Oshimi et al., 2016)。したがって、イベント主催者は必要以上にイベントが

地域に波及する効果を伝えるのは適切ではないことが示唆される。なぜなら、社会交換理論に従えば、期待以上の効果を得られなかった住民はイベントへの支援に対しネガティブな態度を取る可能性があるためである（Ap, 1992）。また、イベントに関わる効果を自分事として認識することで、イベントの支援意図により強い説明力を持つことも明らかとなったことから、イベント主催者はいかにして地域住民をイベントに巻き込み、イベントを「自分事」として捉えさせるかが鍵となることが示唆される。

表 1. イベント前・後の社会効果の値

		イベント前		イベント後		イベント後	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD
経済活動の促進	ラグビー2019	3.97	1.29	3.59	1.41	3.64	1.29
	東京 2020	3.28	1.61	2.68	1.28	3.17	1.44
イメージ・認知度の向上	ラグビー2019	4.11	1.39	3.93	1.64	3.98	1.46
	東京 2020	3.55	1.68	3.44	1.49	3.44	1.57
新たな機会の獲得	ラグビー2019	3.51	1.47	3.33	1.55	3.31	1.46
	東京 2020	3.22	1.55	3.10	1.43	3.14	1.48
地域での一体感向上	ラグビー2019	2.89	1.37	2.60	1.36	2.69	1.30
	東京 2020	2.66	1.51	2.37	1.32	2.69	1.46
快感情の獲得	ラグビー2019	3.48	1.54	3.69	1.73	3.58	1.62
	東京 2020	3.00	1.71	3.21	1.66	3.28	1.62
社会関係資本の促進	ラグビー2019	2.98	1.35	2.69	1.38	2.81	1.33
	東京 2020	2.63	1.51	2.54	1.38	2.83	1.46
スポーツへの興味促進	ラグビー2019	3.26	1.51	3.11	1.60	3.13	1.50
	東京 2020	2.88	1.59	2.97	1.56	3.08	1.57
開催経費の過負担	ラグビー2019	3.99	1.36	3.12	1.41	3.61	1.21
	東京 2020	4.87	1.79	5.01	1.73	4.86	1.62
混乱や混雑の増加	ラグビー2019	3.91	1.21	2.53	1.24	2.66	1.18
	東京 2020	4.51	1.59	3.66	1.50	3.49	1.42
不安感の増幅	ラグビー2019	4.01	1.36	2.85	1.34	3.01	1.28
	東京 2020	4.30	1.56	3.67	1.55	3.73	1.48
新型コロナウイルスに対する不安感の増幅	ラグビー2019	-	-	-	-	-	-
	東京 2020	5.31	1.76	5.15	1.70	4.58	1.64

研究 2 については、文脈が類似している 2 つの都市（熊谷市及び東大阪市）を対象とした。双方ともに市内にラグビー専用競技場（熊谷市：熊谷ラグビー場、東大阪市：花園ラグビー場）を抱えておりラグビーW 杯の開催会場となった。また、ラグビーのまち（ラグビータウン）を標榜し、同競技場及びラグビーを起点とした地域活性化を自治体主導で行っている点も共通している。インタビューは両市ともにスポーツ行政担当の自治体職員を対象に行われた。インタビューの結果にもとづき、2 つの都市のイベントレバレッジモデルを作成した（図 1）。レバレッジの資源、機会そして、戦略目標については 2 つの都市において共通しており、イベントを通じてイベントツーリストの増加やメディアの注目、そして住民の関与を高め、ラグビー及びスポーツの関係人口（する・みる・ささえる）の増加や都市ブランディングの強化、そしてシビックプライドの醸成に伴うラグビータウンの推進を戦略目標としていた。戦略目標を達成する手段については、地元スポーツチームとの連携やスポーツツーリズムの推進、ラグビー場を中心とした周辺施設の開発、新たな組織の設立なども共通事項であった。双方ともに、ラグビーに対する理解や熱量の高さを活用し大会期間前・中・後で多様なイベントを開催し、市内外の関係人口を増やすことでスポーツ・ラグビーの振興やシビックプライドの醸成に繋げる背策を展開していた。

熊谷市で特筆すべき点としては、ラグビー2019 後に熊谷スポーツコミッションを同市に設立

し、ラグビーW杯後に継続してスポーツツーリズムを推進し、合宿の誘致やイベントの開催をスポーツ行政の柱の一つにしている点にある。東大阪市は、スポーツのまちづくり戦略室を2017年に設置（現スポーツのまち推進室）し、ラグビーのみならず「ウィルチェアスポーツの聖地」を標榜し、車いすスポーツ専用のコートを整備した。その他、花園ラグビー場が立地する花園中央公園をPark-PFIによって整備し、高校ラグビーの聖地である花園ラグビー場を目指したOB・OGを対象とした「マスターズ花園」を新設するなど、同公園を拠点としたハード・ソフト面一体となった多様な取り組みを行っている。

2つの都市に共通する今後の課題として、継続的な取り組みを通じた更なるイベントの誘致や創設、多様なステークホルダーを巻き込んだイベントの収益化、またKPIの精緻化と定量化などがあり、メガ・スポーツイベント後の更なる継続的な取り組みが期待される。

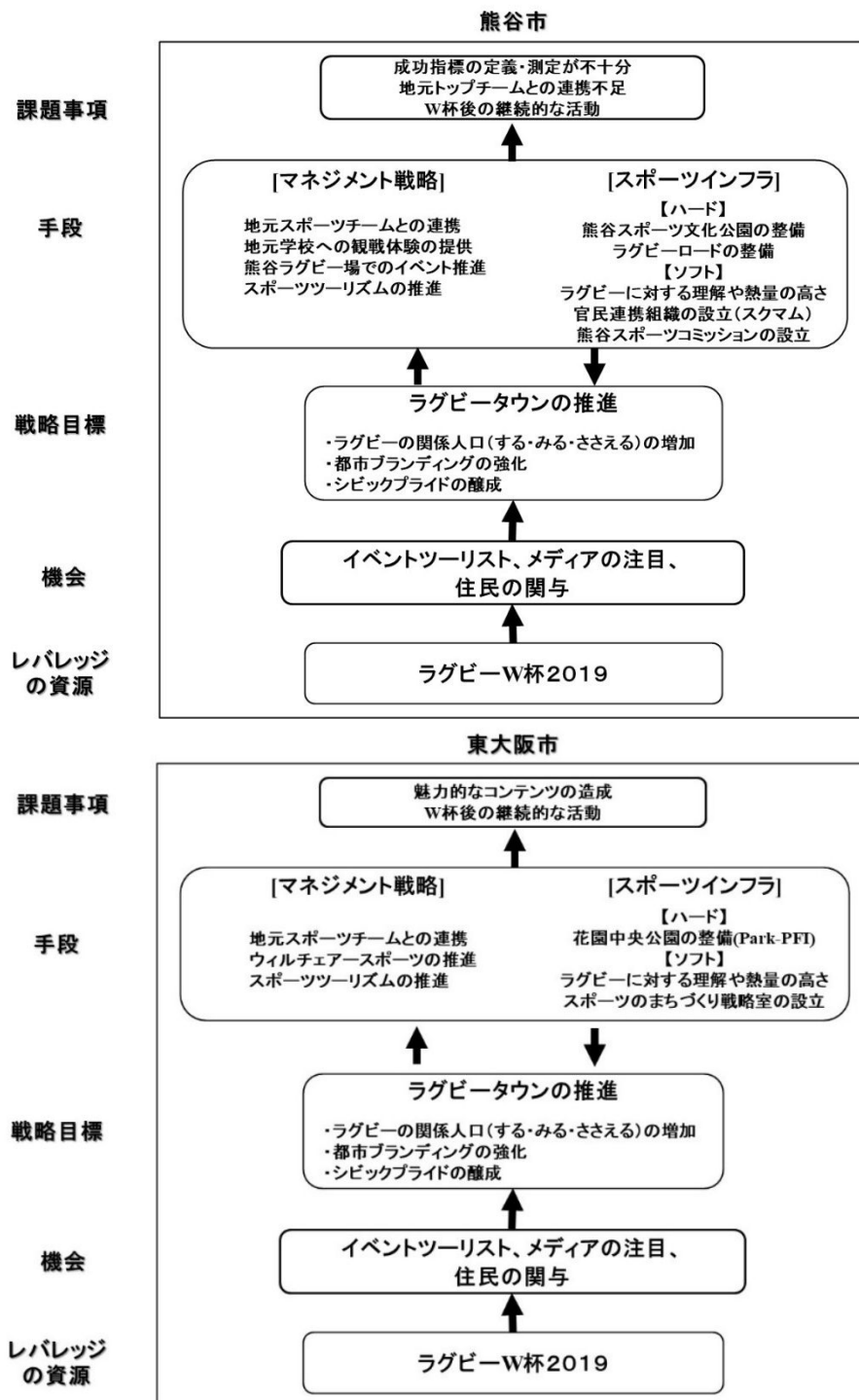


図1 熊谷市および東大阪市におけるイベントレバレッジ戦略

本研究全体の意義としては、わが国で行われた2つのメガ・スポーツイベントを対象に、縦断データを用いて地域住民の社会効果を定量的に明らかにしたこと、そして、イベントを通じて開催地域の地域活性化をどのようにして展開していったのかを定性的に明らかにした点にある。我が国において、縦断データを用いたスポーツイベントの社会効果の検証やイベントレバレッジフレームワークを用いた事例は極めて少ないことから、今後わが国で実施されるスポーツイベントを開催・誘致するうえで有用なエビデンスを提供できたと考えられる。本研究を一つの事例として、今後行われる大小様々なイベントを対象に、エビデンスの蓄積が行われていくことを期待したい。一方で、本研究の限界として東京2020の延期や無観客試合での実施など、過去に例のない大会形式となったことにより、当初計画していた調査を十分に行えなかった点が挙げられる（例えば、オリンピックにおいてはレバレッジフレームワークを適用できなかったことや両イベント開催に伴う相互作用の検証等）。したがって、東京2020の社会効果の結果の解釈はそうした点を考慮に入れて行う必要がある。

< 引用文献 >

- Ap, J. (1992). Residents' perceptions on tourism impacts. *Annals of Tourism Research*, 19(4), 665–690.
doi:[10.1016/0160-7383\(92\)90060-3](https://doi.org/10.1016/0160-7383(92)90060-3)
- Balduck, A., Maes, M., & Buelens, M. (2011). The social impact of the Tour de France: Comparisons of residents' pre- and post-event perceptions. *European Sport Management Quarterly*, 11(2), 91–113.
doi:[10.1080/16184742.2011.559134](https://doi.org/10.1080/16184742.2011.559134)
- Chalip, L. (2006). "Towards social leverage of sport events". *Journal of Sport and Tourism*, 11, 109–127.
<http://dx.doi.org/10.1080/14775080601155126>
- Kim, S. S., & Petrick, J. F. (2005). Residents' perceptions on impacts of the FIFA 2002 World Cup: the case of Seoul as a host city. *Tourism Management*, 26(1), 25–38.
doi:[10.1016/j.tourman.2003.09.013](https://doi.org/10.1016/j.tourman.2003.09.013)
- Oshimi, D., Harada, M., & Fukuhara, T. (2016). Residents' perceptions on the social impacts of an international sport event: applying panel data design and a moderating variable. *Journal of Convention and Event Tourism*, 17(4), 294–317. doi:[10.1080/15470148.2016.1142919](https://doi.org/10.1080/15470148.2016.1142919)
- Oshimi, D., Yamaguchi, S., Fukuhara, T., & Taks, M. (2021). Expected and experienced social impact of host residents during Rugby World Cup 2019: a panel data approach. *Frontiers in Sports and Active Living*, 3, 628153. doi:[10.3389/fspor.2021.628153](https://doi.org/10.3389/fspor.2021.628153)
- Oshimi, D., Taks, M., & Agha, N. (2022). Social impact of events: Advancing insights on social impact scales. *European Sport Management Quarterly* (in-press).
doi: [10.1080/16184742.2022.2076891](https://doi.org/10.1080/16184742.2022.2076891)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 4件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Oshimi Daichi, Yamaguchi Shiro, Fukuhara Takayuki, Taks Marijke	4. 巻 3
2. 論文標題 Expected and Experienced Social Impact of Host Residents During Rugby World Cup 2019: A Panel Data Approach	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in Sports and Active Living	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fspor.2021.628153	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Taks Marijke, Oshimi Daichi, Agha Nola	4. 巻 12
2. 論文標題 Other- versus Self-Referenced Social Impacts of Events: Validating a New Scale	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Sustainability	6. 最初と最後の頁 10281 ~ 10281
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/su122410281	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Sato Shintaro, Kinoshita Keita, Kim Minjung, Oshimi Daichi, Harada Munehiko	4. 巻 1
2. 論文標題 The effect of Rugby World Cup 2019 on residents' psychological well-being: a mediating role of psychological capital	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Current Issues in Tourism	6. 最初と最後の頁 1 ~ 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13683500.2020.1857713	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Oshimi Daichi, Taks Marijke, Agha Nola	4. 巻 in-press
2. 論文標題 Social impact of events: advancing insights on social impact scales	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 European Sport Management Quarterly	6. 最初と最後の頁 1 ~ 20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/16184742.2022.2076891	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Oshimi Daichi	4. 巻 12
2. 論文標題 Social Impact of Mega-Sporting Events	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Journal of Sport Management	6. 最初と最後の頁 3~16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5225/jjism.2020-001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Oshimi Daichi、Yamaguchi Shiro、Fukuhara Takayuki、Taks Marijke
2. 発表標題 Expected and experienced social impact of host residents during the 2019 Rugby World Cup: A panel data approach
3. 学会等名 26st Annual Conference of Sport Management Association of Australia and New Zealand (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山口志郎・押見大地
2. 発表標題 ステークホルダー視点のレバレッジ戦略：ツール・ド・おきなわの戦略目標に着目して
3. 学会等名 日本スポーツマネジメント学会第13回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 押見大地・山口志郎・福原崇之
2. 発表標題 ラグビーワールドカップ2019の社会効果： イベント前後および開催地域・非開催地域の比較
3. 学会等名 日本スポーツマネジメント学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 舟橋弘晃・押見大地
2. 発表標題 メガスポーツイベントが国民に与えた効果の知覚は他のイベント誘致態度に波及するのか：東京2020大会開催と札幌2030大会誘致を事例に
3. 学会等名 日本スポーツマネジメント学会第14回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Potwarka, Luke Richard, Ramchandani, Girish, Derom, Inge, Dickson, Geoff, Jose, Rocco, Jr, Ary, Kaplanidou, Kyriaki, Kim, Kihan, Liu, Dongfeng, Lefevre, Brice, Lera Lopez, Fernando, Oshimi, Daichi, Sotiriadou, Popi, Teare, Georgia, Thomson, Alana
2. 発表標題 Developing an International Collaborative on Trickle-Down Effect Research: Improving Evidence, Theory and Practice
3. 学会等名 30th EASM European Sport Management Conference 2022年9月（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Oshimi, Daichi, Yamaguchi, Shiro, Fukuhara, Takayuki, Taks, Marijke
2. 発表標題 Social Impact, Trust, and Risk Perception of Host Residents in the Tokyo 2020 Olympics during the COVID-19 Crisis
3. 学会等名 30th EASM European Sport Management Conference（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 押見大地（8章：スポーツイベントのレガシー）笹川スポーツ財団編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 笹川スポーツ財団	5. 総ページ数 304
3. 書名 スポーツ白書 2023	

1. 著者名 一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構、原田 宗彦、伊藤 央二、山下 玲、押見 大地、西尾 建、山口 志郎、福原 崇之、佐藤 晋太郎、秋吉 遼子、藤原 直幸、赤嶺 健、中山 哲郎、永廣 正邦、井上 滋道、小西 圭介、滝田 佐那子、高橋 義雄、岡本 純也	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学芸出版社	5. 総ページ数 232
3. 書名 実践 スポーツツーリズム 組織運営・事業開発・人材育成	

1. 著者名 Yoshifumi Bizen & Daichi Oshimi Edited By Stephen Frawley, Nico Schulenkorf	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 408
3. 書名 Routledge Handbook of Sport and COVID-19	

1. 著者名 佐藤晋太郎・押見大地（4章：熱狂を生み出すために）水野 誠、稲水 伸行、笹原 和俊編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 178
3. 書名 プロ野球「熱狂」のメカニズム	

1. 著者名 押見大地（9章：スポーツイベントの社会・経済的インパクト）原田宗彦編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 杏林書院	5. 総ページ数 314
3. 書名 スポーツ産業論第7版	

1. 著者名 押見大地（7章：スポーツイベント）笹川スポーツ財団編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 笹川スポーツ財団	5. 総ページ数 314
3. 書名 スポーツ白書2020：2030年のスポーツのすがた	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山口 志郎 (Yamaguchi Shiro)	流通科学大学	
研究協力者	福原 崇之 (Takayuki Fukuhara)	北海道教育大学	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------